

# 言語と非言語のちがい

[言語が非言語から区別される言語特有の性質とは何か]

——バイリンガル教育を考えるために——

矢沢国光 (ろう・難聴教育研究会)

## 1 バイリンガル教育としての日本語指導

今ろう学校で大きな問題になっていることの一つに、「手話から日本語へ、聴覚障害児の言語能力をどうやって発展させたらよいのか」がある。ろう・難聴教育研究会はすでに10年以上も前から、このテーマを追求してきたが、いまでは全国のろう学校で、このテーマが熱心に研究されるようになった。

「手話から日本語へ」と言っても、最近では聴力利用が進んできて、  
 <音声語・手話の併用から日本語へ>、  
 というケースが増えてきた。この場合の「日本語指導」もかんたんではないし、大きな課題であるが、ここでは「バイリンガル教育的言語獲得」、つまり、

<手話言語の習得が先行し、「手話言語を基盤として」日本語が第二言語として獲得される>  
 ような場合について考える。

といってもここで問題にしたいのは、「日本語の指導法」ではない。日本語のバイリンガルの言語獲得の前提としての「手話言語の獲得」に関してである。

あちこちのろう学校で「手話コミュニケーションがよくできている幼児が、小学部に入ってから、日本語獲得でつまづいている」という話を聞く。そして、文法を意識した日本語指導の実践がさまざま試みられている。

小学部1年生に文法事項の指導がどこまでできるか。

動詞の活用は指導できる、いくつかの助詞の典型的な使用法は指導できるが、指導できない部分もある、使役の助動詞「られる」の指導は難しい、……など。

これだけ見ると、まるでかつての口語法時代の日本語指導に戻ってしまったかのようだ。

「手話でコミュニケーションがよくできるようになった」ことを、日本語獲得に生かすことはできないのか？

「バイリンガル教育」は、「第一言語の言語力が第二言語の言語力形成に役立つ」という考え方に立っている。この考え方は、外国語学習の経験に照らし合わせてみても、正しいように思える。

例えば、中学生になって初めて英語を学ぶとき、

I go.

You go.

He goes.

They go.

のように、「人称」によって動詞の形が変わる、と教わる。こうしたことが理解できるのは、日本語にも、人称や動詞があり——意識するしないは別にして——日本語話者はそのことを自然に身につけているからである。

ア「お読みになればわかります」

イ「読めばわかります」

日本語文のアにもイにも、「私は」とか「あなたは」という主語が出てこないが、話し手も聞き手も1人称・2人称を区別している。アとイを比べると、アは敬語を使っているから、「読む」のは話し手（一人称）

ではなく、相手（二人称）であるとわかるのだ。

ここで一步立ち止まって、手話コミュニケーションと一口に言うが、「どんな手話コミュニケーション」ならば、日本語の獲得に生かせるのか、考えてみたい。

あるいは、次のように言ってもよい。

バイリンガル教育法においては、第二言語（今のばあい日本語）の習得は、第一言語（今の場合手話）の言語力の上になされる、と仮定されている。

では、第一言語の「言語力」とは何を指しているのか？

## 2 第二言語の習得に役立つ第一言語の言語力とは何か

鳥越隆司、グニラ・クリスターソンの共著『バイリンガル教育の実践、スウェーデンからの報告』（2003全日本ろうあ連盟）は、スウェーデンのバイリンガル教育についての報告書である。

スウェーデンでもバイリンガル教育の導入前は、「スウェーデン語対应手話」を使っていた時代があるが、その当時は、スウェーデン語の習得がはかばかしく進まなかった、スウェーデン語とは異なる独自の言語としてのスウェーデン手話を使うようになって初めて、スウェーデン語の習得が進んだ、と述べられている。

とすると、「第一言語」としての要件は、

音声言語の視覚的表現ではない、独自の言語

ということであろうか。「独自の言語」とは、「それ自体が、自己完結的に、言語としての要件を備えている」ということである。「言語としての要件」とは何か。これについては、後で取り上げる。

もう一つ別の観点がある。

聴覚障害者の手話について、

「（この人の手話は）コミュニケーションとしては通ずるが言語になっていない」

という話を聞く。

聞こえる成人について、こういう言い方はない。生まれて6ヶ月の赤ちゃんなら、指さしと視線だけで通ずることがたくさんあり、これは「話は通ずるけど、言葉はない」といってもよい。

成人聴覚障害者が手話を使って話が通じているのに「手話が言語になっていない」とは、どういうことだろうか。

次のように考える：

1. 人と人との対面コミュニケーションの手段は、一般に、非言語と言語の混合体であって、言語だけ（例えば文字だけ）とか、非言語だけ（場面と視線だけ）というのは、むしろ例外的である。

2. 聴覚障害者の手話コミュニケーション手段を構成する身体活動（手指、視線、表情、姿勢など）の中にも、手話言語を構成するものと、構成しないもの（手話言語の一部ではない、従って言語ではないもの。非言語）がある。

3. 成人聴覚障害者の手話コミュニケーションが「通ずるけど手話言語になっていない」という場合があるとすれば、それは、「手話言語に対する非手話言語的な身体活動の割合が比較的に大きく、コミュニケーションが非手話言語に大きく依存している」ということである。

健聴者の音声コミュニケーションについても、非言語的要素に依存する度合いが大きい場合と小さい場合がある。どちらがコミュニケーションとして優れているかという問題ではない。

問題は、手話言語を主たる言語としてコミュニケーションしている聴覚障害幼児において、言語としての手話が十分形成されているかどうか、一見手話言語のように見えても、実際には手話言語ではなかったり、手話言語としての発達が未熟だったりすることはないか、ということである。

幼児のコミュニケーションにおいて「言語としての手話」が十分発達しているかどうか見るためには、その前提として、「言語と言語ならざるもの（非言語）」の区別がなされねばならない。

### 3 言語と非言語を区別するもの

「言語には二重分節があるが、手話には二重分節がない。だから手話はコミュニケーション手段ではあるが、言語ではない」とは、ろう教育における手話排除論の論拠の一つであった。

「二重分節」の有無が、言語と非言語を区別する手がかりになる、と私も考える。ただし、それは従来の言語学で言う二重分節論とは、違った意味においてである。以下このことについて述べたい。

#### 3-1 従来の二重分節論

人と人とのコミュニケーションに現われる音声を録音して、音声の音波を視覚的に表示しても、そこには、連続的な音波が表われるだけである。

ところが、日本語の音声を日本語話者が聞けば、一続きの音声の中に、「単語」を区別できるし、「単語」の中にいくつかの「音節\*」を区別できる。

同じ日本語の音声を日本語を全く解さない人が聞いても、このような区別はできない。同様に、英語の音声を英語話者が聞けば、「単語」を区別することができるし、「単語」の中に「音韻」を区別することができるが、英語を解さない人が聞いても、区別できない。

\*日本語は「カキクケコ…」のような「音節」、つまり「子音+母音」が単語を構成する単位となっている。日本語音節は、101個あるといわれる。範囲を日本語から音声語一般に広げれば、音節の代わりに「音韻【音素】」ということになる。

このように、音声は、その言語としての意味との関連で、「単語」に分節され、さらに「単語」が「音韻（または音節）」に分節されることを「二重分節」と呼んで、人の言語の普遍的な特徴とされる。

では「二重分節がある」ことによって、言語は、非言語にないどのような利点——コミュニケーション手段としての特徴——を獲得するのだろうか？

この点について、言語学の本はほとんど触れていない【註】。「二重分節」は言語の形態的な特徴として抽出されているだけで、それがコミュニケーションにとって持つ意味は、従来の言語学の視野に入っていないのである。

【註】言語学者でありラジオのロシア語講座の講師でもある黒田龍之介氏の『外国語の水曜日』（現代書簡 2000）は、音韻の外国語学習にとっての意味を、「外国語を発音するとき、音韻論的に正しく区別していれば相手にわかってもらえる。そして音声学的にも正しく発音できれば、ネイティブから誉めてもらえる」と述べている。

#### 3-2 「二重分節」は、コミュニケーションにとってどのような意味を持っているか。

まず「二重分節」の二つ目の分節、つまり単語が「音韻」に分節することの意義を考えてみよう。

言語心理学的な実験に、「(でたらめな) 音声を聞いて記憶する」というのがある。

ワタシワ デンシャデ イキマシタ

という普通の日本語の文で、単語の一部（デンシャ）を次のように変える。

(ア) ワタシワ バスデ イキマシタ …… (よく使われる単語)

(イ) ワタシワ カテバンデ イキマシタ …… (でたらめな音声、ただし日本語音節のつながり)

(ウ) ワタシワ процессияデ イキマシタ …… (日本語音節ではない音のつながり)

変えたものを聞かせて記憶テストすると、アイウの順に、記憶しやすいという結果になるはずだ。故・富川哲次氏に勧められて読んだ E.Klima/U.Bellugi の「The Signs of Language」には、アメリカ手話についての同様な実験が報告されている。

記憶しやすい、ということは、子どもの言語獲得を考えた場合、その重要性が推測できる。子どもにとって言語の獲得は、体験した事物に対して音声の「ラベル」を貼り付けてその体験のイメージを記憶し、また、イメージについてのメッセージを相手に伝達することである。

その音声の「ラベル」は、大人〔通常は主たる養育者でありまた愛着関係のある母親など〕の使用したラベルを聞いて記憶し、自分でも使うことによって、子どもの「語彙」の中に組み込まれていく。

子供は生まれたときから〔胎内から、という説もある〕母親の音声を繰り返し聞くことによって、日本語の音韻体系を聞き分ける知覚ネットワークを、聴覚→脳の中に形成する。日本語の音韻で構成されている音声ならば、容易に記憶し、また記憶から喚起し、

同じ音声ラベル（音声表示） ↔ 同じ体験（イメージ、意味）

という結合が成立する。

単語がデジタル記号である——有限個（数十個）の音素の組み合わせでできている——ことは、単語の記憶を容易にする。

また、単語がデジタル記号であることは、「記号としての音の形が、正確に伝わる」ことにつながる。つまり、人から人へと単語が繰り返し伝わっていく過程で、音声の原型がよく保持される、ということである。原型がよく保持されれば、それだけ同じ単語が社会的に共有されやすくなる。

話は少し脱線するが、「コンピュータ言語」とか「DNA言語」と言われる理由も、「音韻＝デジタル性」に関係する。

コンピュータのプログラムは、文字と0から9までの数字で書かれている。コンピュータの機械に読み込む際に、それがさらに0と1の二つの数字の組み合わせに単純化される【デジタル化】。

記号（コンピュータにとっての音韻）が0と1の二つしかないから、伝達するのが容易であるし、滅多なことでは、間違っただけで伝達されないということもない。

遺伝子は二重螺旋の構造体で、その情報は、A（アデニン）、G（グアニン）、T（チミン）、C（シトシン）の4種類の塩基の配列によって構成されていることがわかった。そして、遺伝情報は、複製、増幅によって、細胞から細胞へ、個体から個体へと伝達されていく。この伝達過程がきわめて安定しており、正確であることは、二重螺旋構造にも原因があるが、4つの塩基の組み合わせという「文字言語」的な、つまりデジタル的な情報であることに大きくよっている。

DNA塩基配列の情報伝達における間違いは1000万個に一つくらいしかなく、しかも、DNA合成酵素にはこの間違いを自動的に修復する仕組みが備わっていて、100個の間違いのうち99個まで修復してしまうという。結局最後まで残る間違いは10億個に一つくらいしかないことになる〔美宅成樹、分子生物学入門、岩波新書 54-57p〕。

コンピュータのプログラムや遺伝子情報が〔本来は人間の言語とは本質的に異なるものなのに〕「言語」と呼ばれるのは、文字——音韻——による伝達、という点が人の言語と同じだからである。

ここからぎやくに人の言語に音韻構造のあることの意味が明らかになる。音韻構造があるために、人から人に言葉が、間違い少なく伝達され、記憶されることになるのだ。

### 3-3 「単語」とは何か

二重分節のもう一つは「単語」の存在である。

一続きの日本語音声を日本語話者が聞くと、「単語」の連鎖に分かつことができる。

それを模式的に書いてみると、

【音声のつながり】 キューニアメガザーザーフッテキテビショビショヌレチャッタ

【単語に分節】 キューニ アメガ ザーザー フッテキテ ビショビショ ヌレチャッタ

【形態素に分節】 キュー ニ アメ ガ ザーザー フッ テ キテ ビショビショ ヌレ チャッ タ

「形態素」というのは、＜意味＋音＞の結合の最小単位、つまりこれ以上分割したら意味が失われる、という単位である。「アメガ」は「アメ」と「ガ」に分割できるが、アメ（雨）は「ア」と「メ」に分割できない。

この例では「音声のつながり」のすべてが「単語」に分節されており、単語以外の音声——非言語の音声——はない。「ザーザー」が単語といえるかどうか、という問題が残るが、こうした「擬音語」も言語によって異なり、「ザーザー」は日本語の一部と見てよい [ちなみに、調べてみたが、英語にはザーザーに相当する擬音語はないようだ]。日本語話者なら聞いてわかるが、日本語を知らない人には、意味をとれない。

#### ◇「単語」とは何か

ここで改めて、音声語から切り取られた（分節された）単語とは何か、を考えてみよう。

1) 単語は、それぞれの言語に固有の〔日本語なら日本語音節（音韻、音素）〕の組み合わせでできている。

これはすでに見た「音声語は音韻に分節できる」ということを、単語のレベルで確認したに過ぎないようにみえるが、次の点に関わって、重要な意味を持つてくる。

2) 単語は、**使い回し**できる。つまり、ある人がさまざまな言語表現において同じ単語を使うことができる。また、別の人と同じ単語を同じような意味で使うことができる。「使い回し」がどのような仕組みによって可能となるか、が重要であるが、これについては、後で述べる。

### 3-4 日本語会話の中の非言語

成人の音声語会話には、[手話とちがって] 非言語が混じっていないように見えるが、それは次の事情による。

音声語会話で非言語の部分というのは、ほとんどが音声以外の手段——指さし、視線、表情、場面など——による。従って会話の音声部分だけを記録しても、非言語手段は、表れてこないのだ。実際には、以下の例のように、非常に多くの非言語的要素が、混じっていると見なければならぬ [( ) の中には省略された音声語である]

[ママが食卓で兄にミカンを手渡したとき、弟が] ボクニモ（ミカンを取ってください）

[ママが夕食の準備を終えて、パパに]（食事の準備ができたけど）タベル？

[居酒屋で壁のメニューを指して、居酒屋の亭主に] コレ（をください）

[友人の心臓手術に立ち会った彼が、両手で大きな○を作って、手術室から出てきた]

最後の例では、音声語も音声もゼロであるが、「手術は成功」という意味が伝わる。

日本語の音声会話の中に出てくる「音声のかたまり」であっても、日本語の単語とは言えないものもある。大人の会話では、あまり多くはない。

ウン ドーカー？

ヤーヤー ヒサシブリ！

上記の下線部分であるが、「繰り返し使われる」「使われる場面やその意味についておよその社会的共通理解がある」という意味では「言葉」と言えなくもない。大人の普通の会話には、音声の非言語は、ほとんど現れない。

ところが、子どもの会話には、多く出現する。

次は小1の男子が積み木を車に見立てて、空き箱で作った駐車場で、積み木の車を出し入れして遊んでいるときの発話である。

ドンドン カチャ ガタンガタン カイダン オッコッテネ イッセーニ カイダン ツクッタ  
イチイチ ボロボロ マカシトケ チャーチャー パカパカパカ ヨシッ ツイニ……

下線の部分をみると、ガタンガタン や パカパカは 何かが地上を進むようすを表していると思いが付く。擬声語といってもよい。しかし、ボロボロとかチャーチャーとなると、辞書に載るような擬声語・擬態語とは言えない。つまり、この男子がこの場面でたまたま使った音声であって、ほかの場面で対人コミュニケーションに繰り返し使うというものではない [使っても、意味が通じないから使わない]。したがって、日本語の「単語」とは言えない。

### 3-5 手話コミュニケーションの言語／非言語

#### ◇手話コミュニケーションの非言語

手話コミュニケーションの場合、音声語とちがって、言語自体が音声以外の要素——手指や首の位置や動き、視線、表情、姿勢、場面など——を使うので、言語（手話）と非言語（手話以外のもの）の区別が難しくなる。

指さしは言語か非言語か？聴覚障害幼児の手話の発達の研究で、始めは非言語的な指文字だが、次第に手話としての指さしに変わっていった、という研究がある。成人の手話コミュニケーションにおける指さしは、手話言語の一部と見てよいであろう。

表情はどうか？これも「うれしい」「悲しい」「怒った」というような感情表現と区別された手話言語の一部としての「表情」があるという。

「文法的にきわめて重要な役割を果たしているのが、あごをあげたり引いたり、うなずいたり首を振ったりする頭の動き、……など、手や指以外の動作です。これらをまとめて非手指動作と呼びます。」（木村晴美・市田泰弘、初めての手話、日本文芸社）

では、手話コミュニケーションに用いられる身体表現は、すべて「手話言語」の一部なのか、といえそうではない。

それは「手話と身振りとはちがう、手話は身振りではない」と、言われることからあきらかである。

では、手話と身振りはどう違うのか？

筆者は手話言語については専門的な知識がないので、音声語からの類推しかできない。音声語の「単語」の特徴は「使い回しができる」ことであった。手話言語についても、手話と身振りのちがいは、手話は使い回しができるが、身振りは（その場限りの表現であって）使い回しができないということではないか。

例えば「去年植えたミカンの苗木は、このくらいになったよ」と、手で高さを示すとき、その動作は、この場限りのものです。だから<水平にした手のひらでミカンの木の高さを示す>という動作は、手を使ってはいませんが「手話」とは言えないと思います。

また、二台の車の衝突事故を説明するとき、左右の手の動きで、二台の車の相対的な位置関係を示すことがあります。このように手を使って空間に「絵を描く」ことは、手話コミュニケーションの中に頻繁に出てきます。これもその場限りの表現であって、手話単語とは言えないと思います。

このように「使い回す表現」とは、同じ表現（単語）が別の会話の中に、同一のイメージを表す表現として、繰り返し出てくることです。ぎゃくに「使い回す表現ではない」とは、その場限りの——その会話の中で特定されるイメージを表すためにだけ使われた——表現です。

## 4 健聴児の言語発達における言語と非言語

### 4-1 言語発達と言語／非言語

音声語コミュニケーションの場合、子どもにはあって大人にはほとんどないもの——それが音声形態の非言語である。

子どもの音声語発達には「喃語」というものがある。非言語音から言語音に移行する過渡期の音声とされる。従って、日本語で育つ赤ちゃんの喃語には、日本語音韻の特徴が識別される。喃語は日本語の音韻を持ってはいるが、日本語の「言葉」（単語）とは言えない。

日本語の「言葉」の初めての表出を「初語」といつているが、初語は1歳前後に出てくる。（「初語」は1歳前後だが、理解語はもっと早くからあるといわれる。）

1歳半から2歳台に掛けて、「語彙の爆発的な増加」の時期がある。

### 音声語における言語・非言語の発達

年齢	0歳台	1歳前後	1歳半－2歳台	－6歳	6歳－
特徴	喃語	初語	語彙の爆発的増加	一次的言葉	二次的言葉
非言語コミュニケーションの形態	音声も音声以外にも非言語だけ	音声形態の非言語は少なくなる		ほとんど音声以外の形態	音声以外の形態

ここで「一次的言葉」「二次的言葉」というのは、岡本夏木『言葉と発達』（岩波新書 1985）によって提案された言語発達の段階区分で、聴覚障害教育では広くつかわれている分け方である。ごく大まかに言えば、二次的言葉の代表は「書き言葉」であり、一次的言葉は、「書き言葉以前の言葉」といつてもよい。ここで問題にしている「言語と非言語」の区分という観点から、この「一次的言葉／二次的言葉」を見ると、一次的言葉は、非言語的要素に大きく依存した言葉であり、二次的言葉は、非言語的要素への依存が少ない言葉である。[絵本のようにイラストで場面を補うこともないような]文字だけで書かれた不特定多数向きに書かれた小説などは、非言語的要素がほとんどない[といつても、全くないわけではない。司馬遼太郎の『龍馬が行く』は、読者が幕末－明治維新の日本史の知識をある程度作者と共有していることに依存している。]。話し言葉でも、電話で話す言葉[または携帯メールで伝える言葉]は、相手の表情も見えず、非言語的要素[情報]は少ない。ただ、電話で話す場合、話し手と聞き手は、一定の場面（文脈）を共有しているのが普通で、共有する量は、通常は、小説の作者と読者の場合よりもずっと多い。「買ったよ」と言う（文字を送る）だけで、[聞き手が話し手にある品物の購入を依頼した、という場面が前提となつていれば]聞き手は、話し手に依頼した品物を話し手が首尾よく見つけて購入してくれたことを知る。だから「場面」という非言語的要素が、コミュニケーション手段となつている。

#### 4-2 一次的言葉から二次的言葉へ

一次的言葉から二次的言葉への言語発達は、

①特定の相手【母親など】とのコミュニケーションから複数者を相手とするコミュニケーションへの発展であり、さらには、【クラスでの発言や友達集団内のコミュニケーションのように】不特定多数者を相手とするコミュニケーションへの発展である。

②眼前の【今、ここ】事物についてのコミュニケーションから、【時間的、空間的に】非眼前の事物についてのコミュニケーションへの発展である。

子どもが母親に「なしとブドウとどっちがいい？」と聞かれれば「ブドウ」だけでも済むが、鳩山総理大臣への要望となると、そうはいかない。次の例のように、ていねい語をつかい、条件－結果を表現し、主張の理由を述べる、などの言い回しが必要になる。

「高速道路無料化はやめて有料にしたほうがいいと思います。無料化にしまうと、車から二酸化炭素がたくさん出て地球温暖化が進んでしまうので、反対です。それよりも、電車賃を下げてください。車より、二酸化炭素をあまり出さないし、いっぺんに、多くの人に乗れるので。」（東京・6年、E・U）[毎日小

学生新聞 2009.10.26 拝啓・鳩山総理 2009 : 子どもたちから 200 のてがみ / 1 (その1) から]

③対面のコミュニケーションから【印刷物やインターネットを媒介とする】非対面のコミュニケーションへの発展である。

AとBの対面のコミュニケーションにおいて、Aが「見たくない」と言えば、見たくないのは(その文の主語は)、話者であるAとわかる。Bが「行ってみる?」といえ、Aの意向を尋ねているとわかる。

これが、小説だったら、だれの発言で、だれの行動について述べているのか、わかるように書かねばならない。読む方も、それを読みとらねばならない。そこで、文の「主語」とか「動作主」とか「話題」とかを示す仕組みが必要になる。

このように、コミュニケーションの発達には、使いまわす単語の数を増やすだけでなく、表現内容の複雑さを保障するために、単語の順序や形態変化のルール[統語規則、文法]を作り出す。

### 5 単語の「使い回し」を可能にする言葉の仕組み

ある音韻連鎖が、その場かぎりのものではなく、異なった場面で、繰り返し使用されることを「使い回す」ということにしよう。そして「使い回される」音韻連鎖を「単語」ということにする。

さて、よく考えてみると、ある単語Xが「使い回される」にはつぎのような、いくつかの種類がある。

- (I) 同じXという単語が、「同じ意味」を示す単語として、さまざまな場面でさまざまな人どうしの会話の中に登場する。
- (II) 同じXという単語が、さまざまな「異なる意味」を示す単語として使われる。
- (III) 同じXという単語が、大枠としては「同じ意味」だが、文の中で、動詞になったり名詞になったり、形容詞になったり、異なる役割を演ずる。

以下、それぞれの「使い回し」がどのような言語的な仕組みによって可能になってきたか、みていこう。

#### 5-1 コミュニケーションの手段としての言語ラベルの成立

(I) 同じXという単語が、「同じ意味」を示す単語として、さまざまな場面でさまざまな人どうしの会話の中に登場する。

A「昨日、病院に行きました」  
 B「私は、今日病院に行きます」

先生「高い熱が出たら、保健所に問い合わせ、病院を紹介してもらいましょう」

Aさんは、a病院に行き、Bさんはb病院に行った。さらに、先生は不特定の病院について話している。それぞれが指し示す「病院」は異なる物であるが、同一の「病院」というラベルで示される。どうしてこんなことが可能なのか。「病院」というラベルによって示されるある概念(意味の範疇)が日本語話者集団に共有されている、と考えられる。

これは、言語の本質的な性質であり、それを可能にしているのが「言語のデジタル性」である、といてよい。これについては、すでに述べた。

#### 5-2 言葉の意味拡張の仕組み

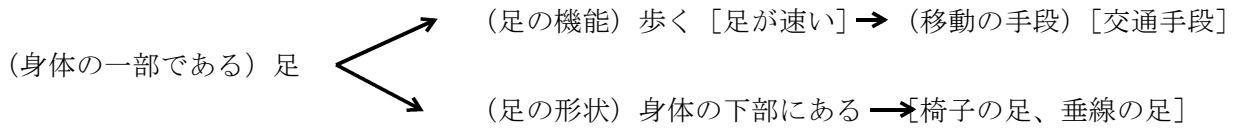
(II) 同じXという単語が、さまざまな「異なる意味」を示す単語として使われる。

単語は「元の意味」からさまざまな「派生的意味」へと「意味拡張」する。それは、コミュニケーションで伝えあう内容は、常に新しい事物であるのに対して、「単語(言葉)」は、常に「古い事物」に付けられたラベルであり、「古い言葉(単語、ラベル)で新しい事物を表す」という言葉の宿命による。例を挙げよう。

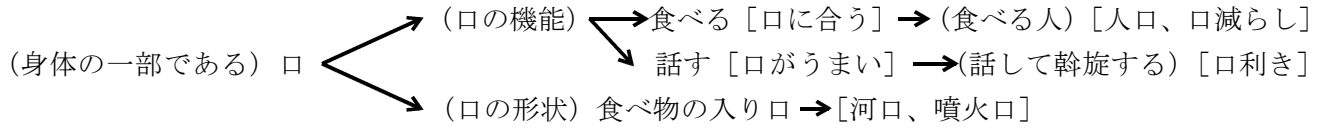
「足」は元々は、身体部位の名称だが、



「椅子の足」、「足が速い」、「垂線の足」などと、意味が拡張する。「台風で電車が止まったので、帰宅の足を奪われた」の「足」は「帰宅の交通手段」のことである。



同様の意味拡張は、他の身体名称にも、見られる。



また、言葉には「見えない物」を表すのに「見える物」を表す言葉をもってする、という拡張方式がよく使われる。

たとえば、空間は、目に見えるが、時間は、目に見えない。だから、空間を表す「長い／短い」、「遠い／近い」が時間を表すように拡張される：「長い一日」、「短時間」、「遠い過去」、「近い将来」。さらに、関係性を表すのにも、転用される：「遠い／近い 親戚」、「成功 に近づく／から遠ざかる」。

同様に「高い／低い」は「私は背が 高い／低い」という目に見える意味から、目に見えない意味に拡張される：「値段が 高い／低い」、「評価が 高い／低い」、「地位が 高い／低い」、「理想が 高い／低い」、「テンションが 高い／低い」

人の気持ちや性格は、物理的に測定できない。だから、測定できる事物の表現を借りて表す。これも言葉の拡張である：「温かい／冷たい 人」、「頭が 硬い／柔らかい」\*、「太っ腹／了見が狭い (小さい)」。

\*ここでの「頭」にも、身体の一部としての頭⇒頭の機能(考える)⇒考え方、という意味拡張が見られる。

こちら辺は「ろう学校教師のための言語学入門(6) ろう・難聴教育研究会会報 11号 2006.7～同(8) 同12号 2006.10」に詳しく書いたので、読み返して欲しい。

このように、同じ単語の「意味」が次から次へと(ある言語社会において空間的にも時間的＝歴史的にも)拡張していくという言語特有の性質があるからこそ、単語はますます広く「使い回される」のである。

### 5-3 形態変化や統語規則の獲得による単語の使い回し

(Ⅲ) 同じXという単語が、大枠としては「同じ意味」だが、文の中で、動詞になったり名詞になったり、形容詞になったり、異なる役割を演ずる。また、「主語」になったり「動詞の目的語」になったり、さまざまな「意味役割」を取る。(なお、ここで「動詞」「名詞」「主語」「目的語」等という言葉を使っているが、便宜的にこれまでの文法用語を借用しただけで、厳密に言えば、正しくない。)

- たとえば「始まる」という単語は
- 2010年が始まった。[自動詞]
  - 餅つきを始めた。[他動詞]
  - 会のはじめに自己紹介があった。[名詞]
  - はじめは緊張した。[状況を示す修飾語、副詞]
  - 初めての海外旅行 [形容詞]

このように、「はじまる」を「はじめる」「はじめ」「はじめて」など**形態変化させて異なる役割を担わせる**仕組みを、作り出したている。

英語では、BEGIN (はじめる) は、begin at 10 page 10 ページから始める [動詞]、Well begun is half done. 出だしよければ半ば成功 [動詞の過去分詞形]、the beginning of the route 道路の出発点 [名詞]、a beginning company 新しい会社 [形容詞] など、形態変化と語順のしくみによって、さまざまな役割をになう言葉とし

て使いまわされる。

こうした仕組みがいわゆる「文法」の存在である。

日本語の一次的言葉から二次的言葉への発達において、どのような文法の獲得がなされるのか。そのすべてをここで確認することはできない。ここでは、二次的言葉の例として短いニュースの文章を取り上げ、そのような文の理解・表出にはどんな文法が必要とされるか、見ていこう。

#### 【ア】 新型インフル予防接種、日本で開始

日本は月曜日、新型インフル対策として、医師やその他の医療従事者に、優先順位リストにしたがって、ワクチン接種を開始した。というのも、国では国産ワクチンの供給が限られているためである。

[初心者に易しい英語ニュース [http://www.eigonews.net/post\\_54.html](http://www.eigonews.net/post_54.html) より]

#### 【イ】 New flu vaccination starts in Japan

Japan on Monday began vaccinating doctors and other medical workers against the H1N1 influenza in accordance with a priority list as the country has a limited supply of the domestically-made vaccine.

上記のアとイは、同じニュースで、実はイの英文が先で、それを和訳した物がアである。

では、ここに引用した短いニュースを読み書きできるためには、どのような「文法\*」が必要だろうか。

\*ここで「文法」と書いて「文法知識」と書かなかったのは、日本語を母語とする者が必ずしも、「日本語文法」を「知識としてもっている」、つまり、他の人に「なぜこうなのか」を説明できるわけではないからである。なぜかは説明できなくても、日本語文として正しいか、間違っているか区別することはできる。こういう状態が「日本語文法を持っている」と言うことである。これは、チョムスキーが、言語の客観的記述に徹すべきとした構造言語学に代わる新しい言語学を創造したときの立場である。

#### 1) 文と述語

どの文にも、述語が必ず一つはあり、ニュースの標題の「新型インフル予防接種、日本で開始」においては「開始」が述語である。

イの英文でも同じだ。

New flu vaccination starts in Japan においては starts が述語であり、何が start するかというと、New flu vaccination (新型インフルエンザ予防接種) である。

一つの「文」には、必ず「述語」が少なくとも一つはある。というより、「述語が一つある語連鎖」を「文」という単位として取り出すことができる。

「日本は月曜日、新型インフル対策として、医師やその他の医療従事者に、優先順位リストにしたがって、ワクチン接種を開始した。」には、述語(下線の言葉)が三つあるが、これは、

- 日本は月曜日、医師やその他の医療従事者に、ワクチン接種を開始した。
- [ワクチン接種を] 新型インフル対策とする。
- [ワクチンの接種は] 優先順位リストにしたがう。

という文の、三つの文から構成されている[複文]からである【註】。

aの「ワクチン接種を開始した」において「ワクチン接種」は一つの名詞句になっているが、これは「ワクチンを接種する」という文[下線が述語]の名詞化したものと見ることができる。実際、英文では、

Japan on Monday began vaccinating doctors and other medical workers

と、動詞(述語)が二つある。

【註】「新型インフル対策として」、「優先順位リストにしたがって」の「する」、「したがう」は、はじめは述語(動詞)であったが次第に慣用的な使用法となり、述語の修飾句を構成する際に使われる機能語になった[文法化した]とみることもできる。実際、英文の対応する箇所では、それぞれ

against the H1N1 influenza

in accordance with a priority list

という前置詞句になっている。これも単語の使い回しに伴う文法的仕組みの獲得の一つである。

このように、発話の単位としての「文」——一つの述語を含む文（単文）——を取り出すことができ、単文の組み合わせでコミュニケーションに現れる文（複文）が構成されているとみることができる。

## 2)文の中の文(複文)

単文が組み合わせられて複文になるについては、言語によって、それぞれ特有の仕組みができています。

日本語では

文 a 1 ワクチンを接種する

文 a 2 [文 a 1 を] 開始する

の二つの文をあわせて一つの複文にする方法として、

文 a 1 「ワクチンを接種する」を「ワクチン接種」という名詞句に変えて

「ワクチン接種を開始する」

としている。英文でも、*vaccinate* という動詞の *ing* 形によって、名詞句化している。

## 3)文と文の接続の仕方

単文の組み合わせ方にもいろいろあるが、学校の文法で「複文」と「重文」という区別を教わる。「複文」は、文の中に文が入り込んでいるもので〔従属節と呼ばれる〕、「重文」は、独立した二つ以上の文が並列的に結合しているものである。このわけ方も形式的に過ぎており、ここであげた短いニュースは、二つの文が形式的には独立していて、「重文」になっていないが、

「日本は月曜日、新型インフル対策として、医師やその他の医療従事者に、優先順位リストにしたがって、ワクチン接種を開始した。というのも、国では国産ワクチンの供給が限られているためである。」

「日本は、……開始した [が、それは] ……ためである。」と一つの文（重文）にかんたんに変えることはできる。それでは読みにくいので、二つの文に分けてある。英文では一つの文になっており、日本語の文 2 に相当する部分は

…… *as* the country has a limited supply of the domestically-made vaccine.

のように接続詞 *as* を使って従属節にしている。

日本語文では、文 1 の理由を述べる文 2 を結合するのに、

[文 1]。 というのも、[文 2] ためである。

という言い方を使っているが、その他にも

[文 1]。なぜなら、[文 2] だからである。

[文 2]。それゆえ、[文 1] である。

などいろいろある。

## 4)述語の要求する修飾語、名詞句

文 a の述語「開始した」だけでは、何を開始したのか、誰が開始したのかわからない。いつ開始したのかも言いたい。このような「述語の要求する関連要素（項目）」は、「修飾語」とか「名詞句」とか呼ばれてきたが、これは日本語文法の呼び方である。中学の英語の授業では、「間接目的語」とか「直接目的語とか教わったと思うが、これでは形式的すぎる。ということで言語学者は、その本質的な意味をさまざま論じている。

「開始する」主体は誰か、を表す言葉は「日本」「Japan」であるが、「日本」「Japan」が「誰か」を表す言葉であって「誰に対して」を表す言葉ではない、ということを示すのに、日本語では「……は」という助詞がついており、英語では、何もついていないが、文の先頭にあるという「語順」によって、そのことがわかる仕組みになっている。同様に、日本語では「……に」、「……を」という助詞によって、名詞句の述語動詞に対する意味づけを示している。英文では、語順がこれを示している。

[誰が]	[いつ]	[誰に対して]	[何を]	【述語】
日本は	月曜日	医師やその他の医療従事者に	ワクチン接種を	開始した
Japan	on Monday	doctors and other medical workers	vaccinating	began

## 5) 時制

日本は、月曜日……開始した。

Japan on Monday began …….

ニュースの内容は、月曜日の出来事であり、「月曜日」という言葉だけでも、これが過去の出来事であるとわかる。しかし「日本は……開始する」では、未来のことになってしまう。ここはどうしても「……た」という過去を示す助詞の「た」を動詞につける必要がある。英文では動詞 **begin** の過去形 **began** が使われている。

このほかにも、まだまだたくさんの「文法」がこの短いニュース文の中には、潜んでいるだろう。「日本語の獲得」とは、日本語の言葉の拡張の仕方を会得するとともに、日本語の文法を会得することである。

そして、今ニュースの日本語文と英文の二つを比較対照しつつ検討したことから窺えるように、どの言語にあっても共通する「言語の仕組み」——言葉の拡張の仕組みと統語の仕組み——があり、当然、それは手話言語にもある。一つの言語で仕組みを会得すれば、それは他の言語の仕組みの会得にとって、有力な基盤を提供すると考えられる。

## 6 今回のまとめ

一次的言葉から二次的言葉への発達は、場面や身振り・表情など非言語的要素に依存しないコミュニケーション手段の獲得とあってよい。それは、言語が「単語」を使いまわす——意味拡張と意味上の役割を使い分ける——仕組みを、非言語に依存せず可能にする仕組みを、言語それじたいの内部に、形成する過程である。

手話を基盤とする日本語獲得という「バイリンガルの日本語獲得」が成功するためには、第一言語としての手話言語それ自体が十分に発達していなければならない。

手を動かしている活発なコミュニケーション、というだけでは、そのコミュニケーションが手話言語中心になされているのか、非言語的な要素に大きく依存していて言語的要素が乏しいのか、わからない。

ろう・難聴児たちは、幼児期からの手話を用いたコミュニケーションを通して、どのくらい手話言語の仕組みを会得しているのだろうか。健聴児が、小学校入学までに日本語の仕組みをおおかた会得するように、ろう難聴児は、手話言語の仕組みをおおかた会得しているのだろうか。

手話言語から日本語へ、というバイリンガルの指導の前提として、ろう・難聴児の手話言語の獲得の現状を確認する必要があるのではないか。 [2009.10.28]